

このpdfは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第1巻（くろしお出版・2007年）の内容見本です。ISBN 978-4-87424-374-9。無断引用はご遠慮ください。『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/edu_top1.html

試論：ことばを学ぶことの根拠はどこに在るのか

—— 韓国語教育の視座 ——



野間 秀樹（のま・ひでき）

1. はじめに
2. 近代日本と朝鮮語
3. 言語教育の中の〈国語〉と〈日本語〉
4. 近代以来の〈外国語〉学習＝〈書かれたことば〉をめぐる
5. エクリチュールの革命＝ゲシュタルトの変革と翻訳と
6. 同時代の朝鮮語学習＝〈話されたことば〉への接近
7. 未来を可能にするための今として学ぶこと＝根拠へ・根拠から

1. はじめに

本稿は、近代以来、日本における言語学習のありようが、いかなるものであったか、そうした中で韓国語学習はいかなるものであったか、同時代の韓国語学習と韓国語教育をとりまく諸条件と課題はいかなるものであるのか、そしてそもそも、ことばを学ぶということの根拠はどこにあるのか——こういったことの一断面を考える試論である。¹⁾

なお、試論といったが、それは本稿が可能な限り、いわゆる〈言語学〉の立場から語ろうと努めてはいるものの、しばしばそうした言語学の境界から逸脱する契機を含むからである。〈言語教育学〉からはどうかというと、これはもうほとんど収まりきれない問題ばかりかもしれない。従って、『韓国語教育論講座』に接する方々は、『講座』の様々な論考へと誘^{いざな}う〈読みかた〉の1つとして本稿に触れていただければと思う。〈言語学〉や〈言語教育学〉は人間的で知的な豊かさ、楽しさ、喜びや感動に満ち溢れた素晴らしい世界であると同時に、例えばたった1つの音にさえ、悲しみや怒り、慟^{どう}哭^{こく}や呻^{うめ}き、更にはそうした語彙でも語り得ないような、果てしなき絶望といったものが、立ち現れるかもしれない世界でもある。

1) 本稿においては朝鮮王朝の言語について多く扱うこともあって、以下、朝鮮語という言葉の名称を用いるが、それぞれの読者の立場で、例えば全て韓国語と言い換えていただいてもよい。本稿が望むのは、先入観を持って言語の名称で立ち止まることではなく、まずその内実へと踏み入ってみることである。

同系の言語であることを論じたもので、学問的な影響力の非常に大きなものであった。⁵⁾ さらにフランスの宣教師による仏韓辞典(1880)や、英国生まれのアメリカの宣教師アンダーウッド(Horace. G. Underwood) (1859-1916)の“韓英文法”(1889), “A Concise Dictionary of the Korean Language” (簡明朝鮮語辞典)(1890)という韓英辞典がいずれも横浜で出版された。後者は韓英, 英韓の2部構成になる, 最初の英語=朝鮮語対訳辞書である。⁶⁾ その後もヨーロッパ人による多くの書物が刊行されている。

日本人の手になるものとしては, 1880年には宝迫繁勝^{ほうせこしげかつ}『韓語入門』などがあり, 1909年には朝鮮語の学問的な記述としては注目すべき前間恭作^{まえまきようさく} (1868-1941)の『韓語通』^{かんごつう}が上梓されている。前間恭作は後に『龍歌古語箋』^{りゅうかごごせん} (1924), 『古朝鮮冊譜』(1944-1957)といった貴重な書を著している。

こうした時期に, 朝鮮語母語話者の中から, 李樹廷(이수정)⁷⁾の『朝鮮日本善隣互話』(1884), 李鳳雲(리봉운)の『國文正理』(1897), 兪吉濬(유길준)『朝鮮文典』(1906), 崔光玉(최광옥)『大韓文典』(1908)などをはじめ, 様々な試みが形となっていった。そして1910年には周時経(주시경) (1876-1914)の『國語文法』が現われ, その後の朝鮮における朝鮮語研究と母語話者に対する朝鮮語教育の精神的な支柱ともなった。⁸⁾ 周時経は金料奉(김두봉) (1889-?)⁹⁾らを始め, 多くの学者を育てたことでも知られる。



周時経

5) 小倉進平著, 河野六郎増訂補注(1964:78-79)参照。

6) その後, 様々な辞書や学習書, 研究書が出されている。小倉進平著, 河野六郎増訂補注(1964)参照。フィンランド出身のアルタイ語学者であるラムステッド(G. J. Ramstedt)(1873-1950)の“A Korean Grammar” (朝鮮語文法) (1939)は現在でも高く評価されている。なお, アンダーウッドは現在の延世大学の前身である延禧専門学校を設立した人物である。同学校は1915年開校し, 1917年に認可, 発足している。

7) 李樹廷(1843-1886)は1882年に来日, 1883年より2年間ほど東京外国語学校の教員であった。1885年には最初の朝鮮語訳聖書『懸吐漢韓新約聖書』を横浜で刊行した。月脚達彦・伊藤英人(1999:969)参照。

8) 周時経は『國語文法』などをはじめ, 術語に朝鮮語の固有語を使用しようとした。固有語による造語も多々見える。近現代の朝鮮語文法における固有語の術語の伝統は周時経が基礎づけたといつてよい。“한흰샘”(真白き泉)と固有語で号した。周時経については, 年譜, 学術用語の解説などを含む金敏洙(1977;1986)が参考になる。なお, 周時経は韓国のみならず, 共和国でも高く評価されている。

9) 金料奉は朝鮮語学者, 民族運動家。周時経のもとで朝鮮語研究に励む。1919年の三一運動を契機に上海へ亡命。独立運動家で歴史家の申采浩(신재호) (1880-1936)らと共に

2.4. 学者たちと学問的な業績

こうしたなかにも、学問的には、重要な業績がたくさん生まれている。周時経の弟子たちが核となって、1921年朝鮮語研究会を組織した。これを1931年には朝鮮語学会と改称する。¹⁴⁾ 金允経(김윤경), 李秉岐(이병기), 李熙昇(이희승), 趙志暎(조지영), 鄭寅燮(정인섭), 崔鉉培(최현배)らを中心に1933年“한글 맞춤법 통일안”(ハングル綴字法統一案), その後、いわゆる「標準語査定」、即ち“사정(査定)한 조선어 표준말 모음”, また“외래어표기”(外来語表記)を定めた。今日の南北の正書法は、基本的にこの1933年の“統一案”に拠っている。南北の正書法が概ね同一であるのは、この正書法の試みがあったおかげであるともいえる。

“외솔”(独りなる松)と号した崔鉉培(1894-1970)は、日本の広島高等師範、京都帝国大学哲学科、同大学院の修了であった。その大著『우리말본』(1937)は近代朝鮮語学の金字塔ともいふべきであり、今日に至るまで絶大な影響力を持っている。解放後は延世大学校教授などを歴任、社会的な指導力も大きかった。金允経(1894-1969)は1938年、『朝鮮文字及語学史』を著している。



崔鉉培

1938年には、総1689ページ、十余万語を収録した文世栄(문세영)編『朝鮮語辞典』が朝鮮語辞典刊行会より刊行された。「ハングル綴字法統一案」による最初の辞書であり、正書法と標準語の普及に大きな役割を果たした。



朴勝彬

これらとは別に、朴勝彬(박승빈)(1884-1943)は1931年、朝鮮語学研究会を組織し、尹致昊(윤치호), 文一平(문일평), 池錫永(지석영), 崔南善(최남선), 李丙燾(이병도)といった錚々たる知識人たちと共に、朝鮮語学会の1933年の綴字法に異論を唱え、機関紙『正音』(1934-1941)全37号を発刊、その後、激しい論争を繰り広げた。こうした論争もまた、その陰では解放後の学問的な

14) 解放後1949年、朝鮮語学会はさらに“한글학회”(ハングル学会)と改称し、今日に至っている。1927年に創刊の機関誌“한글”は、2006年9月現在、273号を数える。学会はまた1947年から1957年にかけて“큰사전”(大辞典)全6巻を刊行している。ハングル学会では、朝鮮語研究会の母体を、さらに遡った1908年の国語研究学会の設立をもって、正式の創立としている。

発達に寄与するところがあったと思われる。¹⁵⁾

1926年に京城^{けいじょう}帝国大学設立¹⁶⁾と共に教授となった小倉進平^{おぐらしんぺい}(1882-1944)の『朝鮮語学史』(1920)、¹⁷⁾『郷歌及び吏読の研究』(1929)、そして遺作『朝鮮語方言の研究(上・下)』(1944)は、朝鮮語学にとって貴重な成果であった。また京城帝国大学の小倉進平のもとで助教授であった若き河野六郎^{こうのろくろう}(1912-1998)は、1945年、記念碑的な論考『朝鮮方言学試攷』(東都書籍、京城)を著す。¹⁸⁾

15) 朴勝彬, 号は学凡。日本の中央大学卒。法律家でもある。『朝鮮語学講義要旨』(1931)、これを補完した『朝鮮語学』(1935)などの著作が知られている。民族啓蒙団体「啓明倶楽部」や朝鮮語学研究会の中心的人物であった。朴勝彬らが用いた「指定詞」、「存在詞」といった術語は現在、日本の朝鮮言語学でも広く用いられている。朴勝彬については、ポスト周時経学派つまり朝鮮語学会に反対したことや、その正書法が1912年の朝鮮総督府の正書法に似ているかのごとくに指摘されたこと、あるいは術語などを固有語ではなく漢字語で設定するなどもあってか、現在の韓国では相対的に低く評価されている。김석득(1983:414-424)では「極端な分析主義」とされる。三ツ井崇(2001)は綴字法問題を中心に、朝鮮総督府、ポスト周時経派たる朝鮮語研究会＝朝鮮語学会、朴勝彬らの啓明倶楽部＝朝鮮語学研究会の「三派の文法」(朴勝彬)をめぐる動態を描き出しており、注目される。

16) 1886年の「帝国大学令」公布より、東京、京都、東北、九州、北海道の5つの帝国大学が作られていった。1926年に京城帝大、1928年に台北帝大が台湾に設立された。このうち、大阪帝大、名古屋帝大が日本本土に作られる。帝国大学は今日なお「旧帝大」といわれるほど、大学の中でもその影響力は大であるが、朝鮮と台湾に他ならぬ帝大を置いたという点からも、植民地の教育と知に対する、帝国日本の力の入れ方が窺える。京城帝大朝鮮語朝鮮文学専攻は、1929年卒業の国文学者・趙潤濟(조윤제)(1904-1976)をはじめ、李熙昇、李崇寧(이승녕)、方鍾鉉(방종현)(1905-1952)、金亨奎(김형규)(1911-1996)、孫洛範(손낙범)、金思燁(김사엽)(1912-1992)、若松實(1912-1994)といった朝鮮語学者を輩出している。安田敏朗(1998:46-52)参照。他専攻では、文人・李孝石(이효석)なども学んだ。教授陣としては、小倉進平、河野六郎の他にも、国語学者・時枝誠記(ときえだ・もととき)(1900-1967)、ソシュールの『一般言語学講義』を訳した言語学者・小林英夫(こばやし・ひでお)(1903-1978)なども在職した。小倉進平については、安田敏朗(1999)参照。時枝誠記と朝鮮をめぐるのは、鈴木一彦(1997)、安田敏朗(1997, 1998, 1999, 2000)参照。同じく小林英夫と朝鮮をめぐるのは安田敏朗(1998:207-215)参照。上田萬年(うへだ・かずとし)や時枝誠記などについての、国語学者の立場からの記述として、大野晋(1976)を挙げておく。

17) その後、この書は、河野六郎による増訂補注がなされ、『増訂補注朝鮮語学史』(1964)として受け継がれた。今日なお、朝鮮言語学の基本的な書物となっている。小倉進平はこのなかで、李完応(이완응)、朴勝彬、崔鉉培、金允経らの著作名を挙げ、「好著」と評価している。(1964:57)。

18) すぐに日本の敗戦となり、この書は消失しかけた。日本に3冊だけが残っていたといわれていたが、後に日本で改めて著作集に収められた。“가위”という単語を中心に歴史的な変遷を追い、全国の方言形を精査しつつ、通時言語学、共時言語学を大きなスケールで統合する大論文であった。朝鮮語史研究に絶大なる影響を与えた。敗戦後、河野

なお、朝鮮総督府は「幾多の朝鮮人学者を委員とし、之に朝鮮語に通ずる内地人委員をも加へ、巨額の費用を投じ、」『朝鮮語辞典』を刊行している。この時点までの、朝鮮語日本語対訳辞書の最も優れたものであった。¹⁹⁾ また、朝鮮総督府は教科書編纂も行ったが、そのうち、唯一朝鮮語で記述されたのが、朝鮮語読本であった。²⁰⁾

2.5. 朝鮮語学会事件

1942年、朝鮮語学会事件が起こった。朝鮮語学会の会員及び関連人士33名が治安維持法違反の名目により投獄されるという大事件であった。言うまでもなく、朝鮮語、朝鮮語研究、民族主義に対する、日本の帝国主義的な弾圧である。16名が起訴され、咸興刑務所^{ハムフン}に収監された。崔鉉培、李熙昇、²¹⁾ 李克魯 (이극로)、²²⁾ 鄭寅承 (정인승) らは1945年の解放まで、3年もの獄中生活を送ることとなる。前述の『朝鮮語辞典』(1938)に寄与するところ大なることで知られた李允宰 (이운재) (1888-1943)、韓澄 (한징) (1886-1944)は獄死した。²³⁾

朝鮮語学会事件に象徴される、植民地朝鮮における朝鮮語をめぐるこうした歴

六郎は東京教育大学の漢文学科、言語学科の教授、また大東文化大学、東洋文庫に籍を置いた。こうして日本の朝鮮語学のみならず、世界最大級の言語学辞書である三省堂『言語学大辞典』の中心的な編者となるなど、言語学をも牽引する1人となる。『河野六郎著作集 1-3巻』(1979-1980)、『文字論』(1994)が代表的著作。

19) 小倉進平著、河野六郎増訂補注(1964:27)参照。

20) 小沢有作(1987:51)参照。なお、同書、旗田巍編(1987:111-201)には第二次朝鮮教育令下の朝鮮語教科書『普通学校朝鮮語読本 巻一―巻六』の日本語訳(権在淑訳)が収められている。

21) 李熙昇(1896-1989)、号は一石。京城帝大法文学部朝鮮語文学科卒。東京帝大の大学院1年を終えている。梨花女子大学校、ソウル大学校教授、東亜日報社長を勤める。著書に『國語學概説』(1955)など。『國語大辭典』の編者として知られる。同辞書は『広辞苑』のように、1970年代までは一種の規範のごとくにも広く使われた辞書であった。

22) 李克魯(1897-1978)は上海の同済大学予科を経て、ベルリン大学哲学部卒。解放前では珍しい、ヨーロッパで学んだ人物である。1930年“한글 맞춤법”制定委員。『実験図解朝鮮語音声学』(ソウル:雅文閣,1947)といった音声学の著作もある。その後、朝鮮民主主義人民共和国成立時には無任所相を努めるなど、共和国でも重責につく。1960年の『조선어문법』編纂に力を尽くしたといわれる。朝鮮科学院を指導した人物の1人で、共和国の標準語である〈文化語〉運動の中心人物である。なお、南北分断後、共和国へ所属した研究者については、韓国の学界では長く言及が控えられてきた。近年になって徐々に言及され始めている。共和国の表記では리극로。

23) 朝鮮語学会事件について日本語で読めるものとしては三ツ井崇(2001)が重要である。最終校正時に知った최경봉(2005)は本稿2.2-2.5に関わる大変貴重な論考である。

史を見据えることなしに、今日の朝鮮語教育はありえない。そして日本語教育、更に言えば、いわゆる「国語」教育を含めた、日本におけるあらゆる言語教育もまた、ありえないであろう。

3. 言語教育の中の〈国語〉と〈日本語〉

さて、朝鮮語教育の歴史を振り返るとき、朝鮮語教育を〈言語教育〉という更に大きな枠の中に位置づけ直し、照らすことが必要である。すると、朝鮮語の裏に、今日「日本語」と呼んでいる言語やその方言、さらにアイヌ語や欧米の大言語の姿が^{あら}頭わになってくる。言語教育の歴史、とりわけ公教育の歴史の中では、朝鮮語教育は朝鮮語教育としてだけで存在していたのではなく、日本が関わっている様々な言語との関わりの中で存在していたことが、より鮮明に見えてくる。

3.1. 言語教育の核としての〈国語〉

近代日本における公の言語教育は何よりもまず、現在我々が「日本語」と呼んでいる言語を、他ならぬ「日本」という「国家の言語」として位置づけるということに、最大の力が注がれたと言ってよい。その「国家の言語」は「国語」という名称で歴史の中に登場することになる。

亀井孝(1971)はまさに〈「こくご」とはいかなることばなりや〉という問いを立てた。²⁴⁾ こともあろうに、「万葉集のことば」と「二十世紀の日本の言語」を

24) 亀井孝(1971:232)は「万葉集のことばと二十世紀の日本の言語とがその実質においていかにことなつたものであつても、なおかつこれらをわれわれがともに“ひとつ日本語のすがた”としてうけとるようにみちびかれてきているとすれば、このばあいそれはすくなくとも直接には純粋な意味での言語学の影響によるものではなく、ある固定した観念の独断である。そういう独断は歴史を超越する形而上学的な絶対の存在を暗黙のうちに——いわば神話として——仮定する。そういう思想からのひとつの派生である。」と断ずる。そして「観念としての“ひとつ日本語”はもと明治以来の国語政策が教育の実践を媒介として定着せしめた虚構にほかならない」とした。亀井孝(1971:255)ではこう述べている。「日本語とはなにかをつねにみずからにといつづけるものとしてそれは専攻に対する倫理への反省にもつながる問題となりうる。なぜならば、たんに一面的に所与として国語があつてそれで国語学があるとす素朴なかんがえをとりえないわたくしとしては国語学が“国語”の観念をつくりだしその“国語学”はそれをささえる体制によりかかつてまたは呼応してみずからを「国語学」と称してきた日本独自の《コクゴガク》のその背景がそこにあるからである。」また、古田東朔「国語という語」『解釈』(1969年7月)があることを書いている。なお、引用文の分ち書きは亀井孝の原文のまま。

試論：ことばを学ぶことの根拠はどこに在るのか（野間秀樹）

「ひとつ日本語のすがた」と考えるのは、歴史を超越する形而上学的な「神話」であるという、驚愕すべき日本語テーゼを投げかけるのである。人々がいわば言語の遠き故郷でもあるかのごとき思いを馳せるあの『万葉集』、「日本語」に思いを馳せる誰しもが自らの拠って立つ根拠とするであろう『万葉集』の言語と、20世紀の日本語が、「ひとつ日本語」とするのは〈形而上学〉であると断ずる。更に「こくご」ということばの意味の歴史を描き出そうとするなら、「《教育勅語》や《軍人勅諭》にもあるいはふれなければならぬであろう」と宣言したのであった。国語学者の内からの、禁忌を破る宣言であった。

更に、日本近代における「国語」という概念の成立とそれが果たした役割については、田中克彦(1981)²⁵⁾を始め、イ・ヨンスク(1996)、安田敏朗(1997, 1998, 1999, 2000, 2006)などに至って、詳細に描き出されている。これらの書は近代日本における言語のありようを考えるにあたって、また言語教育というものの拠って立つ根拠を考えるにあっても、言語教育に従事しようとする者にとって必読の書である。²⁶⁾ これらは何よりも、「国語」の名称ではなく、その内実を問うている。

イ・ヨンスク(1996:v-vi)は言う：

日本の「言語的近代」は、そもそも「日本語」という言語的統一体がほんとうに存在するのかという疑念から出発した。「国語」とは、この疑念を力づくで打ち消すために創造された概念であるとさえいえる。「国語」はできあいのものとして存在していたのではない。「国語」という概念は明治初期にはまったく存在しなかったのであり、日本が近代国家としてみずからを仕立て上げていく過程と平行して、「国語」という理念と制度がしだいに作りあげられていったのである。

そしてイ・ヨンスク(1996:vi-vii)の次のことばは、我々にとっての同時代の問題

25) 田中克彦(1981)は「母語」と「母国語」を区別すべきであることを力説した。この点は今日の日本の朝鮮語教育学界では概ね受け入れられているといえるであろう。韓国でもそれぞれ“모어”と“모국어”という漢字語が用いられており、区別する研究者も多いが、これらが区別されないこともしばしば見受けられる。

26) これらのほかにも、梶井陟(1980)は植民地朝鮮における日本語教育や、日本における朝鮮語教育ということから、「国語」や言語に関わることがらを考えさせてくれる。川村湊(1994)は朝鮮のみならず、いわゆる満州や南方といった、更に広い視野で「国語」ということを見ようとした。また村田雄二郎・C・ラマール編(2005)は、「漢字」や「書くこと」をめぐる中国やベトナムも視野に入れた議論を展開している。

が^{なへん}奈辺にあるかを教えてくれる：

そして、「国語」は日本が植民地を放棄したのちも生き残った。「敗戦」は「国語」の理念の終焉をしめすものではない。現実の植民地はなくなっても、その「思想的根拠」であった「国語」の思想はけっして滅びていない。

こうした「国語」という概念の成立を^{くおんちえすく}権在淑(1982:20)は、次の4点から、1900年前後とみなしている。①日本の国語学界、国語教育界の中心人物の一人であった^{うえだかずとし}上田萬年(1867-1937)が、1895年(明治28年)に『国語論』、『国語のため』といった書を著し、「国語」という概念を駆使する。②1900年(明治33年)8月20日公布の新小学校令において、小学校教科に「国語」科が成立する。「国語」科はそれ以前、「読書及び作文」科と称していた。③1902年(明治35年)3月に「国語調査委員会」が発足している。④1903年(明治36年)には教科書の国定制が定められ、教科書が国家の手によって統制されるに至る。²⁷⁾とりわけ「国語」という概念装置が何よりもまず学校の教科名として現れた点に注目している。そして「国語」という概念が普及してゆく時期は、日清戦争、日露戦争、植民地支配という、日本がいわゆる帝国主義的な体制を完成させてゆく時期であった。このことは、いくら強調しても、しすぎるということはない。権在淑(1982:21-22)は「この〈国語の成立〉は、アジアの諸民族に対する日本語教育が本格的に始まること、つまり、〈対外的日本語教育の開始〉の国内的表現であった」と言い切っている。そして1900年を前後として「日本語をめぐる課題が、国内的には〈国語の成立〉として現われ、対外的には国家的規模での〈日本語教育の開始〉として現われた」のだとする。また「対外的な日本語教育の相」においては、明治維新以来、「散発的・民間主導的」であったものが、1900年前後に対外的日本語教育の本格化が始まり、台湾、朝鮮へ、そして中国本土へと展開するとし、また「国内的な国語問題・国語教育の相」においては、明治維新以前からの〈藩ことば〉から1900年前後の〈国語〉の成立へ、そして「国語が標準語として展開」する

27) 東京帝国大学国語研究室の初代主任教授であった上田萬年と、「国語」の概念成立との関わり、国語調査委員会などについては、イ・ヨンスク(1996)、安田敏朗(1997:5-8)、安田敏朗(2000:140-143)で詳しく論じられている。また、「近代日本における“ナショナリズムと教育”の展望」と題された中内敏夫編(1969:9-43)の中内敏夫による解説は、教育論一般のみならず、近代の様々な人物の言語をめぐる思想の位置づけも試みており、かつそこに編まれた多くの史料は貴重である。

よい。

しかしながら、重要な点は、外国語を〈読み〉、日本語に〈翻訳する〉＝日本語で〈書く〉という図式は、教室における単なる教授法の姿として現れるのみならず、あるいは、プラクティカルな外国語学習の姿として現れるのみならず、日本の〈知〉と〈表現〉の根幹を支える巨大なスキーマとして立ち現れたという点にある。知識人たちの〈母語にあらざる言語で読む〉＝〈母語で書く〉という図式と、日本の公教育における「文法訳読方式」の違いがあるとしたら、それは他ならぬ、〈母語にあらざる言語で読む〉深さの違いと、〈母語で書く〉ことにほとんど至らなかったという深さの違いだけであって、日本の公教育が理想としたところの極北に、〈母語にあらざる言語で読む〉＝〈母語で書く〉という精神的な高みが置かれていたことは、否定できない。そもそも近代の知識人たちが翻訳という営みの中で〈母語で書く〉とは、〈書かれたことば〉そのものの創出でもあったのであるから、公教育における「文法訳読方式」とは苦闘の深さが違うのであるが、

こうした意味において、外国語学習にあつて〈読む〉ことを核として、そのことを水路に、日本語で〈書く〉という営みへと展開したことの成果は、決して否定し去られるべきものではないだろう。何よりも近代以来の膨大なる豊かな知的生産物がそのことを証明している。

4.5. 〈書く〉ことによる〈読む〉ことへの肉迫

ここで、〈書く〉ことと〈読む〉ことを巡る、今日の1つの試みに触れておこう。出雲路修^{いずも} (2003)は、古文で物語を書くことを、大学の古典文学講読の授業において教授するという、注目すべき教育実践の試みである。あるいはこうした教育実践さえも1つの物語りなのではないかと、見まごうばかりである。そこに散りばめられた、若き読み手たちが書いた古文の物語を読むと、実は〈書く〉ことは〈読む〉ことへ肉迫する、あるいは最も大切な営みなのではないかということが、わかる。学生たちは文字通り〈書く〉必要などない古文によって、それも追体験した平安時代の感性に沿って書いてみる。一方的に読むためだけのことばを、読み、かつ書くためのことばとして、古文の書き手たちと一千年を隔てた読み手が、擬似的にせよ共有する。〈書く〉ためには単語の1つ1つを自らのものとせねばならない。自らの外にある外化された対象としての単語ではなく、いわば、その単語の何がしかを共有する社会的な存在としての自己の鼓動を聞きながら、自らのうちに位置づけられた単語として用いる。こうしたありようのうちでは、単語は読み

手にとって疎外された対象ではない。読み手の外にありながらも、読み手の内にある、新たに息づくことばである。読み手は書き手となり、書き手たり得る読み手として、読み手はテキストを読む。単語が、ことばが、表現し=表現される周期の中に生起する。辞書の中にのみ存するような、ピンセットで止められた標本としての単語ではなく、実際の言語場³⁷⁾の中に読まれ=書かれ、輪廻する単語として、ささやかにせよ、読み手の中に息づく。読み手と書き手をめぐるこうした構造、〈読む〉ことと〈書く〉ことをめぐるこうした構造は、非母語の教育に貴い体験をもたらしてくれる、言語教育の1つのありかたとしてだけでなく、〈読む〉ことと〈書く〉ことの本質的な関わりをも示しているように思える。

5. エクリチュールの革命=ゲシュタルトの変革と翻訳と

5.1. ハングル、『訓民正音』の登場

さて、〈読む〉ことと〈書く〉ことを考えるにあたって、朝鮮語学習=朝鮮語教育にあってはどうしても触れておかなければならないことがある。それは他ならぬハングルという文字の存在である。なぜ朝鮮語かという問いへの、極めて大きな答えの1つがここに横たわっているであろう。



世宗 金学洙 画
世宗大王記念事業会所蔵

15世紀、^{くんみんせいおん}『訓民正音』(훈민정음)(1446)という驚嘆すべき書物でハングルは世界史の中に出現した。^{くさびがた}楔形文字や^つ甲骨文字を見てもわかるように、文字は石や粘土板に刻んであったり、骨に刻んであったりといった形で世に現われたものであった。ハングルは単に刻された文字としてではなく、刻されさらに刷られた文字として、その上、何と書物の形で、それも文字を作った理由と、文字の原理と用法を述べた書物の形で歴史に登場した。この点だけでもハングルは驚異的である。

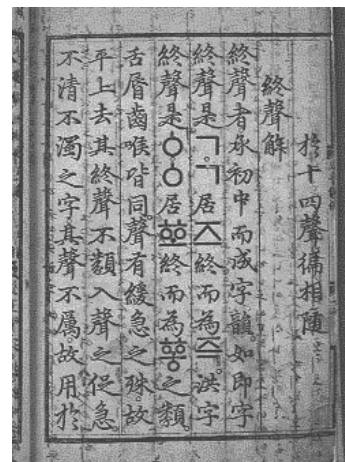
『訓民正音』は新たに民族固有の文字を定めたいと願った朝鮮第4代の王、^{せじよん}世宗(세종)が、当代の音

37) 言語場(linguistic field)とは、実際に言語が行われる場をいう。河野六郎(1977:6, 1994:6)で「言語的場」と呼ぶものがこれに相当する。「対話の場面は話手と聴手の二人の人間を包む言語的場を構成する」を参照。なお、本稿はこれを野間秀樹(1990:3-4), Noma, Hideki(2005), 노마 히데키[野間秀樹](2002:263-264, 2006)のように用いる。

韻学と文字学の粋を集めて作り上げたものであった。15世紀朝鮮の知の結晶であった。音韻を初声，中声，終声，そしてアクセントという4つの要素に解析し，字母と傍点ぼうてんを与えて組み上げ，朝鮮語の音の形態音韻論的(morphophonological)な目くるめく奔放さを，字母と傍点の動的なゲシュタルト(Gestalt)³⁸⁾のなかに描き出す。その表記システムは，永き歴史を誇る中国音韻学を凌いで余りある。³⁹⁾ 永く額ぬかずき，永く手本として憚はばからなかつた大中華の思想を，ある点では現代言語学げんたいげんごがくに肉迫するともいうべき先進的な知で止揚する知の結晶体であったと言わねばならない。漢字で朝鮮語を表記しきれないという限界は，これによって悠々と超えられることとなった。

5.2. 正音中心主義

『訓民正音』は世に「解例本」かいれいほん (해례본)と呼ばれる書物で現われたが，これは漢字，漢文によってハンゲルの原理や用法を記述した書であった。⁴⁰⁾ そしてハンゲルを創製するや，その翌年には朝鮮王朝の建けん国こくを称える叙事歌『龍飛御天歌』(1447)，釈迦しやうかの頌歌『月印千江之曲』(1447)という書物が現われる。⁴¹⁾ これらはハンゲルによって朝鮮語を書き表した書であった。ハンゲルによるエクリチュール (書)⁴²⁾の出



『訓民正音』解例本

- 38) “Gestalt”とはドイツ語で「形態」の意。日本語では「ゲシュタルト」とも。本稿では，“個々の要素に還元することでは得られないような，総体として統合された形”ほどの意で用いている。もちろん，用法はともかく，術語自体は，ヴェルトハイマー(M. Wertheimer)やコフカ(K. Koffka)，ケーラー(W. Köhler)らのゲシュタルト心理学(Gestaltpsychologie)に借りたものである。
- 39) 朝鮮語の音の奔放さと，ハンゲルという表記システムの精緻さは，形態音韻論という現代言語学のプリズムを通して覗くとき，いよいよ顕わになる。本書，音韻論と形態音韻論の稿参照。また本『講座』の，表記論関連の稿，言語史，音韻史の稿参照。
- 40) 本『講座』にはまた趙義成(ちょ・ういそん)による『訓民正音』の稿が独自に用意されている。
- 41) 本稿に現われる，こうした書物に関しては，本『講座』，福井玲(ふくい・れい)による言語資料に関する稿を参照されたい。また，安秉禧(1992)参照。
- 42) フランス語エクリチュール(écriture)[ekrityɾ]は，“書かれたもの”，「書くこと」の意。「文字」，「文字体系」，「筆跡」，「文体」などの意でも用いられる。「書く」を表す動詞“écrire”(エクリール)の派生語である。英語では“writing”，“script”などとも訳されるが，人文思想などでは外来語としてそのまま用いられることも多い。日本語でも「エクリチュール」という外来語として，極めて多様に用いられている。しばしば

現である。どこまでもハングルによる朝鮮語を主とし、漢文による訳文と註を付したものであった。世宗たちのこうした理念、文字使用の意識を志部 昭平(1986:52)は「正音中心主義」と呼ぶ。

5.3. 正音エクリチュールと翻訳

こうして生まれたハングルで、その後、他ならぬ朝鮮語を更に書いてゆこうとしたとき、人々は何を書いたか？——〈翻訳〉である。漢字、漢文が唯一の〈文字〉であり、〈文〉であった時代に、正統たる〈文字〉である漢字、正統たる〈文〉である漢文と同じ高みで屹立する、ハングルによる朝鮮語のエクリチュールを打ち立てること。これが『訓民正音』以来の巨大な流れを形作る、朝鮮語の〈書かれたことば〉を形成する戦略であった。確認すべきは、この〈翻訳〉とは、既に存在する2つの書記システム間の移し替え、2つの言語間の移し替えを意味しないということである。かつて誰一人として目にしたこともない、朝鮮語の〈書かれたことば〉、そして文体としての〈書きことば〉をゼロから新たに創造するという営みだったのである。

5.4. 漢字伝統派と正音革命派の闘争

崔萬理(최만리)(1400-1445?)は、中国の韻書にハングルで字音をつけ、書を作るという計画に際して、「朝鮮は建国より、至誠事大、一に華制に^{したが} 遵う、若し中国に伝わり、之を非議する者あらば、事大慕華の精神に愧づるところである」とハングルの創製に反対し、王を^{いさ} 諫めた。⁴³⁾ エクリチュールの伝統派である崔萬理の存在をかけた上疏文(1444)である。崔萬理たちを大中華のくびきから逃れられぬ^{じだい} 事大主義者と切って捨てるのは早計であろう。崔萬理たちにとって、いや王朝のほとんどの知識人たち、さらにいえばこの地に生まれ死んでゆくあらゆる知識人たちにとって、犯すべからざる〈文〉たる漢文は、それほどに重いのである。文字とは漢字のことであつて、文とは漢文のことである。自らの知、王朝の知、そして朝鮮王朝が歴史に現われる遙かなる昔から、ありとあらゆる知は漢字、漢文によって形象化されて来た。いかに王といえども、知の根幹に抵触することは

パロールに対する概念としてエクリチュールの術語が用いられる。本稿では「書くこと」、「書く営み」ほどの意で用いている。韓国の人文思想では“글쓰기”(≒文章書き)あるいは“글”と固有語で訳されることが多い。

43) 崔萬理の上疏とそれに対する世宗の意については、小倉進平著、河野六郎増訂補注(1964:122-129)や姜信沆(1993:174-192)、影印『朝鮮王朝実録』世宗実録卷一百三参照。

許されない。「結繩」文字——崔萬理が引いた例である——など用いていた時代ならいざ知らず、「用音合字 尽く古に反す」、即ち音によって文字を形づくるなど、古からの伝統に照らしても、ことごとく、ありえない思考である。そう、「用音合字」、漢字の世界にも、地中海のアルファベットの世界にもかつて現れなかった思想である。わずか「二十七文字の諺文」をもって「官達する」などありえない。「今此の諺文は新奇の一芸に過ぎず、学に於いて損あり、治において益なし」と断ずる。「新奇の一芸」、歴史が作り上げてきた知のヒエラルキーの崩壊をも招きかねない、崔萬理らの危機感溢るる呻きはそうしたものであった。確認するが、世宗と崔萬理のこうしたやりとりももちろん、漢字漢文というテキストで現在の我々の前に残っている。

伊藤英人(2004:246)は、「古来、中国において音を統べる事は世界を治める事であった。音階としての呂律を定め、字音の正音を定める事は帝王の責務であった。唐の武則天、日本の桓武帝もそのような帝王であった」とし、「世宗の『正音』という用語もそうした文脈で解されるべきものである」と喝破する。音を形象化するところに成り立つエクリチュールを統べること、そして漢字で統べることのかなわぬ、この地の〈音〉を統べること、世宗、崔萬理に答えて曰く、「若し予、其の韻書を正すにあらざれば、誰かよく之を正さん。」韻書を正す、〈音〉を統べるのは自らであるという朝鮮王・世宗の宣言である。即ちこの地の〈言語〉を統べること。世宗は変革者であると同時に、一方で、どこまでも大中国の皇帝の傘の下にある王に過ぎない。これはどう控えめに読んでも、朝鮮王朝の王、東方の王としての隠然たる叛旗である。

5.5. エクリチュール革命宣言

鄭麟趾 (정인지) (1396-1478), 44 解例本の跋に言う。「天地自然の声有れば、則ち必ず天地自然の文有り。」この地の〈文〉は天地自然のありようである。この地にこの地の声があり、この地のエクリチュール在るは人為にあらず、中国皇帝を超えた、天地自然の理^{ことわり}である。事大主義を圧倒する理論武装である。「殿下、正音二十八字を創制し」「名づけて曰く、訓民正音と。」民を訓える正しき音という。「三極の義、二氣の妙、該括せざる莫し。」この訓民正音には天地人の三極の義、陰陽の妙さえ、ことごとく備わっている。ありとあらゆるもの、正音、これ

44) 鄭麟趾は成三問 (성삼문) (1418-1456), 申叔舟 (신숙주) (1417-1475)らと訓民正音創製に参画。『龍飛御天歌』にも関与した。

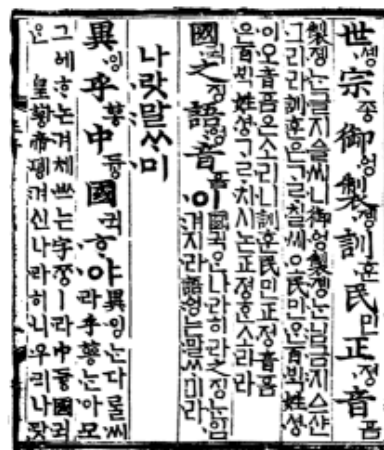
を蔵す、と説く。「二十八字を以てして轉換窮まり無く、簡にして要、精にして通ず。」わずか二十八文字によって、そのありようは変幻自在、簡潔ながらも要を押さえ、精緻にして貫く。「用ゐて備はざる所無く、往きて達せざる所無し。」これを用いれば書けないということがない、及ばぬところがない、森羅万象を我がものとしうる文字である。「風声、鶴唳、鶏鳴、狗吠と雖も、皆得て書くべからん。」風のそよぐ音も、遠き鶴の鳴き声も、夜明けを告げる鶏鳴も、そして犬の遠吠えさえ、ことごとく正音の表せないものはない、どうだ、かつて漢字で朝鮮語のオノマトペまで表せたか?—鄭麟趾、渾身のエクリチュール革命宣言である。

崔萬理の存在をかけた諫めも受け入れられなかった。仏教を排し儒学の教えに立ち返るべきであるという「斥仏上疏」すること七度に及ぶと言う崔萬理も、この上疏は世宗の逆鱗に触れ、「無用の俗儒」とであると、職を解かれた。⁴⁵⁾

5.6. 浮かび上がるハングル・ゲシュタルト

儒学の正統派、原理主義者たる崔萬理のような者たちの存在を考えても、漢字、漢文に対峙しうる〈正音〉の〈正音〉たる姿を形象化しなければならない。漢字に拮抗しうる正音の形象化。エクリチュールの変革者たちは当の『訓民正音』を朝鮮語に翻訳し、ハングルによって表記し、詳細なる註を付すということも企てる。いわゆる『訓民正音』「諺解本」(언해본) (1451-1459?)がこれである。

「解例本」の「國之語音異乎中國」という漢文に対して、「國·국·之·징·語·형·音·음·이」, 「異·잉·乎·중·國·국·之·하·야」のごとく漢文にいわゆる吐あるいは口訣(구결)と呼ばれる、「てにをは」、語尾の類を付した朝鮮式の漢文体、〈懸吐文〉(けんとぶん)によって解析し、さらに「나·랏·말·ㅅ·미」, 「中國·에·달·아」とハングルで書かれた朝鮮語を顕示する。懸吐文と詳細なる割註はひとところに書かれるのに対し「나·랏·말·ㅅ·미」(くにのこことばが)というハングルの訳文は、それがどこま



『訓民正音』諺解本

45) 崔萬理と上疏を共にした学者たち7名のうち、崔萬理を含めほとんどが、翌日には許されている。4ヶ月後には全て復職している。姜信沆(1993:178-179)参照。(正音)をめぐる、こうした論争が政治闘争、権力闘争というより、(知)をめぐる論争という性格が濃厚であったことが窺える。

でも主^{あるじ}であるといわんばかりに、それぞれの句に独立した行を与えられる。朝鮮語の訳文が終わるたびに、その下は空白を与えられるのである。この空白は重要である。漢文、あるいは漢文の懸吐文を背景として、ハングルによるエクリチュール（書）が前面に屹立する瞬間だからである。漢文の地の中にハングルのゲシュタルト（形態）が浮かび上がる。「正音中心主義」は「諺解本」の紙面のこうしたありようにさえ現われていると言わねばならない。

5.7. 〈諺解〉と〈翻訳〉のエクリチュール

漢文をこうしてハングルによる朝鮮語で解くありかたは、16世紀以降、『正俗諺解』、『四書諺解』などのように、〈諺解〉と呼ばれた。以降、様々な書物に諺解というエクリチュールが作られてゆく。他方で、〈諺簡〉^{げんかん} 46) と呼ばれる、個人の手紙などの類にも、ハングルは用いられた。それにもかかわらず、志部昭平(1986:52-53)が言うように、「文字創製直後のごく一部のもの——『龍飛御天歌』、『釈譜詳節』、『月印千江之曲』(以上1447)、後二者を合編改訳した『月印釈譜』(1459)——を除くなら大部分「諺解」という漢文を介した特殊な形式をとって残されていることで、伝達内容が直接朝鮮語だけで記録されたものはほとんど残されていない、という事実」に注目せねばならない。朝鮮語の〈書かれたことば〉の巨大な軸は〈翻訳〉という契機をうちに含むものだったのである。

翻^{ひるがえ}って、日本にあってもまた漢字、漢文の受容は朝鮮以上にローカライズされたものである。訓点を付し、返り読みをするという、漢文の読み下し文はもはや中国の言語ではない、他の言語ではない、⁴⁷⁾ 他の言語の要素を内に宿すところの、自らの言語のうちの特別な文体である。そして子安宣邦(2003:69-100)が言うように、漢文の〈訓読〉とはまさに〈翻訳〉に他ならない。かくして漢文を翻訳するという〈書かれたことば〉の伝統は日本にあって一千年を生き続ける。

朝鮮語や日本語の中の〈翻訳〉という契機は、それぞれの言語の〈書かれたことば〉を形作る、決定的な柱であった。そして〈翻訳〉という営みの中で、中国語の古典語という他の言語が、自らの言語を支える基礎として、言語の隅々にま

46) 諺簡については、金一根(1986)などを参照。

47) 漢文を返って読むということは朝鮮においては行われていなかったと思われていたが、このかんの口訣研究によって、漢文を返って読むということが、一部に行われていたことがわかってきた。ただしこのシステムは、伝統的な漢文の読み方としては、今日、伝承していない。『講座』、伊藤英人による古代語の稿を参照。

で根を下ろすのである。〈正音〉というエクリチュール革命でさえ、膨大なる〈漢字語〉を内に蔵^{ぞう}すシステムであった。少なくとも朝鮮語や日本語を見るとき、これらの言語は、その本質においてアマルガムなのであって、それも日々刻々うごめくアマルガムの姿をしているのである。

朝鮮語や日本語における〈翻訳〉のありようは、あるいはヨーロッパなどの諸言語への聖書の翻訳という営みが、あるいは中国語への仏典の翻訳という営みが、それぞれの言語の〈書かれたことば〉にとって、さらに〈書かれたことば〉の創出にとっても重要な役割を果たしていることを思えば、質の違いはあっても、普遍的なありようであるとも言えるであろう。西欧諸語からの明治時代の文学の翻訳は言うに及ばず、そもそもギリシアの知をローマの知として獲得しようすることからして、〈翻訳〉という契機なしには語れない。神々でさえ、ゼウス(Zeus)はユピテル(Jupiter)として溶解する。プラトン(Πλάτων; Plato)はギリシア語のみのプラトンにあらず、ラテン語によって濾^ろされたプラトンであったかもしれない。現代ではもはや英語というフィルターを通したプラトンでさえあるかもしれない。

5.8. 〈諺解〉エクリチュールの構築＝〈ゲシュタルトの再構築〉としての翻訳

しかしながら同じく〈翻訳〉という装置をくぐるにせよ、朝鮮にとって衝撃であったのは、既に存在する文字を用いて翻訳がその結果を形にするのではなく、〈文字〉を創製し、それを用いるという、いま1つの営みと重なって現われたことである。あらん限りの理論武装をしたラジカルな〈知〉によって生み出された〈文字〉は、王という権力を背景に、印刷術というテクノロジーにまで支えられ、⁴⁸⁾ 優れて現実的な基礎の裏づけをもって提起されるものであった。15世紀朝鮮語エクリチュールの変革者たちにあっては、〈翻訳する〉とは、単に言語から言語へと転換することを意味しない。〈書かれたことば〉の形象たる文字をも、その意匠ごとと変革することを意味したのであった。〈翻訳〉とは、形象化される〈ゲシュタルトの再構築〉でもある。

48) 朝鮮の印刷術はよく知られたところである。高麗末、14世紀には木活字と銅活字による活字印刷が行われている。ただし朝鮮の印刷はグーテンベルクとは違って、大量に印刷されることはなかったとされる。印刷術については金斗鍾(1981)などがある。また書物同好会編(1978)は1938年から1943年まで20号にわたって京城にて刊行された『書物同好会会報』の影印であるが、鮎貝房之進、末松保和、田川孝三などといった多くの研究者の、書誌学、印刷術などに関する日本語での著述が多数収めてあり、貴重である。

5.9. 〈正音空間〉の美学

『訓民正音』が刻され、印刷された文字として出現したのは偶然ではない。こうした歴史的、論理的帰結としての、ありうべき形であったといわねばならない。一点一画は筆遣いを拒否したところに存在する、高度に意匠化されたゲシュタルトを有する。2文字以上を続け書きする連綿れんめんは否定され、払い、はねといった筆法は抑制され、活字印刷術まで見据えた結構を採るのである。篆書体をはるかに超えた、易こウの爻49を思わせんばかりの、極限までデザイン化されたその字形は、たとえ筆遣いを知らぬ、『訓民正音』序にいう、「愚かなる民」であっても、何のためらいもなく〈真似まねび〉、〈学ぶ〉ことができたであろう。朴炳千（박명천）（1983）は創成期のハングルは「書いた」文字ではなく、「描いた」文字であると断ずる。ハングルは小枝で地に刻むことさえ似合わぬものではなかったであろう。

そしてゲシュタルトは反復されることによって、自ずから様式(style)となる。様式とは価値を背負ったゲシュタルトに他ならない。美学、精神性、そういった価値をハングルの〈かたち〉が語り始める。ゲシュタルトが転回する。



『訓民正音』解例本

こうして見るとき、驚くべきことに、『訓民正音』「解例本」の文字の意匠は、エクリチュールの形象たるゲシュタルトの変容であったにとどまらず、朝鮮をも

49) 爻(こう)は、易の卦(け)を構成する横の画。

蓋^{おお}っていた中国、東晋の書家・王羲之^{おうぎし}(307?-365?)以来の〈書〉の権威さえも、破壊しかねない〈かたち〉だったのである。⁵⁰⁾『訓民正音』は朝鮮の知のヒエラルキーの根幹を揺るがすのみならず、そうした知と分ちがたく結びついていた〈書〉の意匠にまで踏み込むことによって、〈書〉に連なる芸術性や精神性の既成の価値のありようにまで抵触するものとなった。^{うろこ}鱗=セリフ⁵¹⁾に象徴される明朝体の結構も、竹林のごとき宋朝体の結構も、どこまでも〈筆〉の趣に発するものであるが、『訓民正音』解例本の正音の結構は違っていた。

ここで、ギリシャを始めとするヨーロッパについて語った、今や古典的なベンヤミンの次のことばを思い起こしておこう。「その後、木版によって、はじめてグラフィックという複製技術が可能になった。印刷によって文字が複製されるようになるには、ながい時を要した。この印刷による文字の複製が文学にきわめて大きな変化をあたえたことは、周知のことである。この変化は、世界史の尺度から見ても、もちろん他に類例のない、とくに重要な現象であった。中世紀間に、木版に銅版^{エッチング}と腐蝕銅版が、十九世紀初頭には、石版^{リトグラフィ}が加わってくる。」⁵²⁾〈正音〉は身体性、一回性を拒む、〈印刷〉された〈複製芸術〉でもあったのである。

15世紀朝鮮の知が形象化された東洋の〈正音空間〉とは、〈筆〉が支える身体性の美学と精神性が、印刷術を介した〈タイポグラフィの美学〉によって覆されんばかりの空間であった。

5.10. 〈書かれたことば〉に内在する〈翻訳〉とそれを読み解く〈翻訳〉

このように見てくるならば、日本語においてはもちろん、朝鮮語においても〈書

50) とはいえ、知識人たちが自ら手にとって書く道具は依然として筆であったから、ハンゲルの書体も筆で書かれることによって作り変えられてゆく。他ならぬ『訓民正音』「諺解本」には既に筆を意識した書体への移行の兆しが見えている。諺簡などでは連綿が盛んに行われ、やがて、朝鮮においても筆による〈書〉のシステムの中にハンゲルを組み入れるということが行われることになる。王朝の主は女性たちの手になる17世紀から18世紀へ至る〈宮体〉(きゅうたい/궁체)と呼ばれる書体の成立は、ハンゲルが再び〈書〉の美学の中に取り込まれることの完成だといえる。ハンゲルの書体、とりわけ書法に関しては、朴炳千(1983, 1985)を参照。また野間秀樹(1986)参照。

51) 明朝体の例えば「一」の画の最後に現れる三角形のとめを日本の印刷用語では「鱗」という。西洋のタイポグラフィでは“I”などに現れる上下の三角形を“serif”(セリフ)という。セリフのない、いわゆる「ゴシック体」は“sans serif”(サン・セリフ=セリフなし)という。

52) ベンヤミン(1970:10-11)参照。なお、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)(1892-1940)はドイツの思想家、文芸評論家。

朝鮮語の母語話者さえ、すぐ隣にいるかもしれないから。アパート隣に韓国人がやって来るなどというのも日常的なできごとであり、場合によっては、地方の町にまで朝鮮語話者がやって来るのである。こうして生きた朝鮮語話者との出会いが、多くの人々に現実味をもって予感できる時代となった。そしてその予感は多くの人にとって、ちょっとその気になりさえすれば、2時間もあれば韓国の地で現実のものとなる。〈朝鮮語は隣にやって来た〉のである。それも〈書かれたことば〉をも携えた〈話されたことば〉という姿で。

このように、今日、朝鮮語は、学習者が“アンニョンハセヨ”（こんにちは）と声をかけると、“アンニョンハセヨ”と返ってくる言語である。“アンニョンハセヨ”と声をかけて、“アンニョンハセヨ”と返ってくる瞬間を、多くの学習者が体験できる言語である。この瞬間とは、大げさに言えば、人がことばによって心と心を一瞬なりとも通じ合う実感を得ることができる瞬間である。今日の日本において、朝鮮語はことばが人と人をつなぐ瞬間を体験しうる言語である。これはことばを学ぶことによる喜びの、素朴ながらも決定的な喜びに違いない。ことばが人と人をつないでくれるのであるから。

6.6. 〈話されたことば〉との格闘

ところで、言語学習という観点に立つと、〈話されたことば〉の学習は〈書かれたことば〉の学習とは、そのありかたが決定的に異なって現われる。

〈書かれたことば〉の前に〈人〉はいないといった。それに対して、〈話されたことば〉との格闘は、基本的に言語場における〈話す人〉との直接的対峙となる。単に物理的、生理的に言語音を解析するだけではこと足りない。言語場のうちには、他が在って、自らが在る。生身の自らを他の前に、言語場の中にさらけ出すという、自らにとっては恐るべき危うさを伴う空間でもある。ハイデガー(M. Heidegger)のことばを換骨奪胎して借りれば、どこまでも〈我々が聞くのであって、耳がではない〉⁵⁷⁾のである。そこでは悟性的、理性的なものに勝るとも劣らず、感性的、感情的なもの、〈人〉の総体がことばそのものを左右する。〈話されたことば〉の前では悟性的、理性的な解析という回路だけでは、太刀打ちできない何ものが存在する。文字通り、人間的なありとあらゆる回路が必要とされるかもしれない。〈話す〉ことのためにはどうしても〈話す〉という訓練が別途に必

57) Heidegger (1957;2006:87) “Wir hören, nicht das Ohr.” および Reginald Lilly の英語訳(1996:47)を参照。

要なのである。無菌化された空間などではなく、人がその中で息づく空間としての言語場を見据え、そのただ中で〈話す〉訓練が必要なのである。

〈話す〉ことは〈話す〉ことによつてのみ鍛えられると言つた。〈読む〉ことをいくら積み重ねても、〈話す〉ことができるようにならないのは、単に学習法の次元の問題などではなく、〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉とのこうした言語存在論的な⁵⁸⁾深い違いに根ざすものである。

このように、〈書かれたことば〉と〈話されたことば〉は、そもそもの言語場のあり方が、〈私〉にとって決定的に異なるものであり、そのことによつて、それらを学ぶありかたそのものが、自ずから異なりうるものである。

6.7. 〈共にある〉ことの意識化

〈話されたことば〉が実現する言語場にあつて、〈聞く私〉、〈話す私〉は常に〈話す他者〉、〈聞く他者〉と共有する空間の中に在る。〈他と話す〉とは、否定なしに〈他と共にする〉営みとなる。そこには私と他者の間の絶えざる相互作用が行き来する。〈話されたことば〉を獲得するためには、こうした相互作用、〈共にあること〉を意識化し、目的意識的に学ばねばならない。

6.8. 〈話されたことば〉の対位法的構造

例えば、2人が対峙する〈話されたことば〉の言語場、即ち〈対話〉(dialogue)の言語場にあつては、〈聞く私〉、〈話す私〉は常に〈話す他者〉、〈聞く他者〉と共にある。私が話しているときに、他者が聞き、他者が話しているときに、私が聞く。Sacks et al.(1974)はこうしたことを“turn-taking” (ターン・テイキング) という形で描き出そうとした。いかなるときに turn, 話す順序の交代が起こるかといったことを、実際の英語の談話の分析から明らかにしようとしたのである。

そして今日の研究では、実は私が話しているときに、他者が聞き、他者が話しているときに、私が聞くといった、単純な構造でないことが、わかってきた。こうした構造は、例えば、^{きむじな}金珍娥(2003, 2004, 2006)などによつて、日本語と朝鮮語

58) 言語がどのような構造をしているかとか、どこで話されているかといった問いは、言語学が正面から取り組んできた。しかし言語が〈いかに存在しているか〉という問いには言語学は正面から取り組んでこなかったように思える。言語が〈いかに存在しているか〉、どのような姿で存在しているのか、さらに言語と言語的な意味はいかに存在しているかといった問いについての思考を言語存在論(ontology of language or linguistic ontology)と呼ぼう。Noma, Hideki(2005), 노마 히데키[野間秀樹](2006)を参照。

のありようさえ異なるのだといったことまで、明らかにされつつある。

そこでは例えば〈話されたことば〉の実現形態である〈談話〉“discourse”における、〈あいづち〉というものの働きが描かれる。既存の“turn-taking”研究が〈あいづち〉を独立した1つの“turn”と認めていなかったことを超えて、相手が話しているときに同時に発せられる〈あいづち〉もまた、“turn”を十全に取っているのだということが明らかにされる。“turn”とは、単に今度は誰が話すかといった「順番」などではない。“turn”とは何かということを更に突き詰めるなら、単なる「順番」などではなく、金珍娥(2003, 2004, 2006)が言うように、〈誰が話しているか〉という、発話の物理的な実現そのものであるということに帰結する。〈発話の物理的な重なり構造〉が照らされるのである。そして“turn”をめぐるこうした一連の研究を見るとき、究極的には次のような命題にたどり着く：

2人の対話にあつては、2人とも話しているのが default である

つまり、相手が話すときに耳を傾け、機会を見て turn を取り、自らが話す、それに相手が耳を傾ける、そして必要な際には話している途中でもあいづちを打つ、といったありようは、対話の現象的な様相ではあっても、原理的には、〈2人が常に同時に話す〉のが default (初期状態) であると言わねばならない。対話はキャッチボールだとよく言われる。だが対話はキャッチボールではない。対話においては、〈話されたことば〉は対位法 (counterpoint; 独語 Kontrapunkt) 的な構造として実現する。いわばどちらかが turn を取る、つまり発話を実現するというより、必要なところでは、休止符のように〈どちらかが沈黙する〉、あるいはどちらかが意識的にせよ、無意識的にせよ、好むと好まざるとに関わらず、ことばを発するのをたまたま控えているのである。そして、更に次のような命題に逢着する：

〈話す〉ことと〈沈黙する〉ことを選びながら、対話者たちは語り続ける。

〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の決定的な違いがここにある。そう、〈話されたことば〉にあつては〈常に共に語る〉のである。〈書かれたことば〉の言語場にあつては、たった1つのテキスト、それも目の前になければならないテキストを読むだけだが、〈話されたことば〉の言語場では、複数の話し手のことばを多声的(polyphonic)に聞くといったことさえ、起こりうる。古典的“turn-taking”

研究を超えた、〈発話の重なり〉の発見は、^{ポリフォニー}59) 何よりも〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の組織が構造的に異なることを教えてくれた。そして人と人とが、いま・ここに、共にあるという、〈話されたことば〉の根源的なありようを照らしてくれるのである。

6.9. 言語的表現と非言語的表現の総体としての対話＝沈黙という戦略

言語場の中にあつて、言語的表現はそれ自体が独立して存在しているわけではない。よく言われるように、話し手の表情、態度といった、いわゆる **non-verbal** な、非言語的な表現、ありようは、対話の最初から最後まで、いや、実はことばによる〈対話〉が始まる前から、始まった後まで、ひと時の絶え間もなく続いている。そしてこれら非言語的な表現を含めた総体のなかで、〈どちらかが言語では表さない〉だけなのだと言わねばならない。〈どちらかが沈黙する〉理由はまさにこの点にある。〈話されたことば〉が実現する言語場にあつて、沈黙(**silence**)は言語を用いない積極的な表現であり、自らの非言語的な表現へと相手の意識を誘う、戦略的な表現形態である。〈沈黙－発話－沈黙〉“**silence - utterance - silence**”という回路こそ、“**turn-taking**”論を通底する構図であり、であるがゆえに、金珍妮(2003, 2004, 2006)が喝破したごとく、発話の重要な実現であるところの〈あいづち〉を“**turn**”と認めなければならないのである。

6.10. 〈話されたことば〉そして〈書かれたことば〉をめぐる教育の構図の変革

このように考えるならば、〈話されたことば〉をめぐる教育の、原理的な構図も根底的に考え直さなければなるまい。〈話す〉と〈聞く〉が別々の切り離された行

59) 日本語に関する“**turn-taking**”の活発な研究は面白い成果を数多く生んでいる。ただ、それらにあつてはあいづちを **turn** として認めないのが主流である。そうした考え方はあいづちという発話を実現していても、談話の構造の中にあいづちは位置づけえない。また〈発話の重なり〉も **turn** を誰が取るかという択一的な選択という観点からしか見ていなかった。しかし金珍妮(2003, 2004, 2006)が初めて定式化したように、発話を実現さえすれば、それが **turn** として実現しているのだと見ることによって、あいづちも含めて、複数の話者の **turn** が同時に実現するという、談話の多声的な動的構造を描くことができる。談話の内容的な主導権云々と、談話の物理的な構造つまり言語形式の構造とは別の次元の問題である。そして場合によっては、たった1つのあいづちが、談話の内容的な主導権を握ることさえありえよう。ポリフォニックな多層構造の中へ **turn** と発話の重なりを位置づけることは、談話の物理的な構造、言語形式としてのありようを描くという点ばかりでなく、それらと区別されるべき、談話の内容的な構造、言語内容としてのありようを描くという点でも、不可欠である。

いであって、それらを継ぎ合わせて〈対話〉が成り立つというようなわけでは決していない。〈話す〉ことと〈聞く〉ことは、談話という実践の中では1つの大きな有機的な流れの中に統一される。そして〈話されたことば〉をめぐる教育のテーマは次のように提起されよう：

対話という言語場に立つとき、さあ、君は常に話すのだ。

既に述べたことから解るように、〈常に話す〉とはもちろん、その原理的なありかたを言うのであって、最初から最後までことばを発し続けろということではない。非言語的な表現と言語的な表現の総体をもって、対話者は〈常に〉語るのである。こうした言語場に投げ込まれることは、1人の個にとって、場合によっては耐え難いものであるかもしれない。沈黙のなかで学んでいればよかった教室での学習のあり方とは、およそ異なるものだからである。「恥ずかしがらずに、さあ、話して」といった教師の声も、学習者にはあるいは届かないかもしれない。そうした言語場は、時として自らを傷つけるものだということを、人は本能的に知っているからである。

〈話されたことば〉を見据えるとき、〈書かれたことば〉と異なる様相として浮かび上がるのはturnをめぐるこうした談話の構造に留まらない。それはこのかんの談話研究が素朴な形で提起してきた、1文を超える〈談話〉という対象への様々な取り組みや、〈テキスト〉をめぐる研究が教えてくれる。⁶⁰⁾ 今、1文を超える〈談話〉といったが、実は1文が集まって談話を成すのではなく、談話という総体の有機的な張り合いの中にそれぞれの1文が呼吸しているのである。文 (sentence) を継ぎ合わせば、会話になるのではない。

本稿がそうした問題を語る余裕はない。ここでも〈話されたことば〉の実現体

60) 談話や語用論をめぐる全般的な諸問題については、メイナード(1997, 2004)、トマス(1998)、堀口純子(1997)、クールタード(1999)、橋内武(1999)などがある。さらにテーマを絞った研究成果として水谷信子(1983, 1988)、串田秀也・定延利之・伝康晴編(2005)、砂川有里子(2005)、石崎雅人・伝康晴(2001)がある。朝鮮語の談話をめぐる研究は、日本語に比べるとはるかに遅れていたが、近年、박용익(1998)、이원표(2001)、송경숙(2003)などが現れている。金珍娥(2006)は日韓対照研究という形の談話研究の新たな胎動である。談話をめぐる諸問題についても、本『講座』では金珍娥などの論考によって知ることができる。なお、韓国のテキスト言語学は談話論に比べると、고영근(1995)、고영근 외(2001)、고영근 밖예(2002)をはじめ、はるかに多くの論考が現れている。반 다이크(Van Dijk)(1995)といった翻訳書も見える。

点から見ると、音声言語至上主義とは、〈エクリチュール化された音声言語〉の至上主義であったと言わねばならない。我々はもっと虚心坦懐に〈話されたことば〉を見据え、〈話す〉ことと〈聞く〉ことを学ぶと同時に、〈書かれたことば〉がいかなるものかも、新たに見つめ直しながら、〈読む〉ことを新たに学びなおさなければならないであろう。それは〈書く〉ことへの新しい視座を提供するものともなるであろう。

今日、朝鮮語教育は言語教育、言語学習のありかたを根底から覆す契機を内包するものとなった。もはや、日本の一千五百年来の言語学習のありかたから、更に新たな地平へと踏み出さなければならない。そしてこのことは、ひとり朝鮮語教育のみならず、ありとあらゆる言語の〈学ぶこと〉、〈教えること〉のなかに、多かれ少なかれ、要求されてくるのである。

7. 未来を可能にするための今として学ぶこと＝根拠へ・根拠から

7.1. 言語教育の根本を律する唯一の原理〈かけがえなき母語〉

数ある言語のうち、一人の個にあって、唯一特権的な地位を占める言語は母語(mother tongue; first language; native language)である。自らが考え、悩み、喜ぶ、ありとあらゆる回路を司る母語こそは、たとえそれが他から強いられたものであったとしても、さらに進んで、よしんば唾棄すべき言語であったとしても、「そう、私は一つしか言語を持っていない、ところがそれは私のものではない」という、デリダ(2001)⁶²の「単一言語」の特権化の無化を目論む、呻きのごとき言説さえ、「私のものでない」言語によって語らざるをえないという、まさにその点において、個にあっては、母語が自らを形作ってきたという点において、何人たりとも侵すことのできない、かけがえのない存在である。いかなる他とも置き換えがきかないという点において、母語とは〈自らの存在^{みずか}〉とほとんど同義である。この〈かけがえなき母語〉というありようこそ、ありとあらゆる言語教育の根本を律し、全てを位置づける唯一の原理たりうるであろう。自らにとってかけがえなき母語こそが、まさに自らに対峙する他にとってもまた、かけがえなき母語で

62) デリダ(2001)によれば、ジャック・デリダ(1930-2004)はアルジェリア近郊にユダヤ系の両親から生まれた「フランス-マグリブ-ユダヤ人」である。同書の原題は“*Le Monolinguisme de l'autre : ou la prothèse d'origine*”で、訳者である守中高明は、直訳すれば「他者の単一言語使用——あるいは起源の補綴(ほてつ)」となるだろうとしている。デリダ(2001:173)。

あるからである。母語に対する認識こそ、他者の言語に対する想像力の根拠となろう。⁶³⁾

7.2. 母語を失うということ：移ろいゆく言語としての母語

ジャック・デリダのみならず、あるいは母語となるはずであった言語が失われるという事態も、我々のすぐ身の回りに、今日いくらでも起こりうる。いわゆる在日二世の人々が日本語を母語として生まれ育ち、朝鮮語を失うという、「母国語」の喪失は、〈あるいは母語でありえたかもしれない言語〉の喪失でもある。それは在日二世が単に朝鮮語母語話者の子であるという、そうした条件によってのみ語りうる喪失であって、自分自身にとっては〈一度も存在していないものの喪失〉でもありうる。しかしながらこうした〈母語でありえたかもしれない言語〉の喪失は、当の人々に起因するものでないばかりか、決して負のありようなどでもないことは、言うまでもないことであるが、やはり触れておかねばならない。在日韓国人の青年たちが韓国を訪れてしばしば出会うことになる、「韓国人なのに朝鮮語も話せないのか」といった非難は、ことばがいかんして獲得されるかについての想像力さえあれば、一切成立しないことは容易にわかる。そして朝鮮語学習が今日のように拡大すると、今度はそうした非難が、こともあろうに日本人からも起こりうる。言語が〈所有されるもの〉として人間の前に立ちはだかる瞬間である。人はことばの中で育つ、そしてそのことばは、自らの〈民族〉の言語とは限らない。在日の人々にとって日本語が母語であることは、言語と人間の存在のしかたの原理的なところで、断固として自然なありようである。父と母が既に朝鮮語の母語話者でさえない三世、四世にいたっては、言をまたない。日本にいる朝鮮語母語話者に子が生まれる、そして父母は母語である朝鮮語で語りかけるであろう、しかしながら子がたとえ保育園、たとえば幼稚園という〈日本語の場〉に通いだした瞬間に、母語が日本語と化すという事態がいくらでも起こりうる。

我が子が最初に覚えたことばは〈アッパ〉（パパ）であった。そして次に〈オンマ〉（ママ）を覚え、〈マンマ〉（マンマ）を覚えた。朝鮮語の母語話者である母の語りかけに、我が子は朝鮮語で答えた。朝鮮語で答えていた子が、そして後に生

63) “native” ということばは慎重に用いられなければならない。〈母語〉 = “native language” という構図をこそ、突き崩すことが必要かもしれない。今福龍太(2001)はこの“native” という概念を手始めに、更に思考を飛翔させる。同書、〈ヴァナキュラー〉(vernacular)の概念、そして〈クレオール〉論は必ず触れておかねばならないだろう。

まれた弟にさえ朝鮮語で語りかけていた子が、いつしか日本語の母語話者として育つ。母語とはそのように移ろいゆく存在である。もし日本に育った朝鮮語母語話者の子弟の中に、朝鮮語を母語のように駆使する子がいたら、おそらくその家庭では母語を維持するための血を吐くような努力がなされていたか、あるいは母語を維持できるような環境を備えていたかのどちらか、または、その双方であったろう。繰り返すが、母語とは、移ろいゆく言語である。

7.3. 人と人を裂くことば

母と子の、父と子の母語が異なりうるということは、親子の間をも、他ならぬ母語が引き裂くということをもたらさう。このことを理解するためには、次のテキストを前にするだけでいい：

やがていつものように眠りに落ちた。そして、どれくらいしてからだろう。私は黒く重いものが自分の顔におおいかぶさってくるのを感じて、醒めた。見ると、父が私の枕元から立ちあがろうとしているところであった。立ち上がり、天井のところで輪を結んでいた電燈線を解いているのだ。私ははっきりと醒めた。父が首を吊ろうとしているのが、わかったのだ。私ははね起きた。同時に兄がはね起き、私たちは両側から父の手に縋りついた。

… (中略) …

私はいかめしい父の目に涙のあふれていたのを憶えている。それから、父の自殺を食いとめようとして、必死に叫んでいた自分の心の悲痛を。私たちは、日本語で叫び、哀願した。そして父は朝鮮語で答えていた。私たちの日本語は生きることを切願し、父の朝鮮語は生き続けることの絶望を語っていたはず。私は父の手にしがみつき、しがみついたまま自分の体が宙に吊りあげられていったときの恐怖を憶えている。⁶⁴⁾ — 高史明(1973:15-16)『彼方に光を求めて』

日本で生まれ育った、日本語の子と、朝鮮で生まれた朝鮮語の父、ここではことばが人と人とを裂く。縋^{すが}りついた子たちは、紛れもなく父と接し、触れあっている距離にあるにもかかわらず、ことばは果てしない距離へと、こともあろうに、親と子を裂く。生と死の間ほどもある距離である。もし言語というものを私たち

64) このテキストで語られるできごとは、実はこれで終わりではない。同書には我々の想像を絶する結末が待っている。

が考えるなら、言語のこうしたありようを決して忘れてはなるまい。ことばは人と人とを繋いでくれるばかりではなく、人と人とを裂きもする。

7.4. ことばによって他と交わる＝言語形成のありかたと言語を学ぶということ

ことばが人と人とを裂くことを語る高史明のテキストは、ことばが交わされているにもかかわらず、それがことばだということだけが鳴り響き、意味というものが実現しないという、絶望的な悲しみを教えてくれる。父と共に子たちが宙に吊り上げられたとき、ことばもまた宙に吊り上げられてしまう。人は意味を受け取れないときに、ことばが見える。ことばは意味となる、そして意味が実現する間は、ことばの存在は忘れている。意味が実現しなくなったとたんに、人はことばの存在を見るのである。意味が姿を現すとき、ことばは後ろへ退き、意味が失われるや、ことばが前に立ち現れる。ことばが人を裂く瞬間とは、ことばが意味となりえなかった瞬間である。そうであるがゆえに、人はことばが意味となりうることを、かくも狂おしいほどに、求めるのである。ことばが意味となりえるならば、あるいは、ことばが人と人とを繋ぎうるかもしれない。高史明のテキストは、絶望の果てに、ことばが意味たり得ることの貴さを教えてくれる。ことばが人と人とを繋ぎうることの大切さを教えてくれる。

そして実は、人がことばのなかに意味を求めようとするありようは、他ならぬ自らがことばというものに触れた、自らの存在の始まりの中にあつたありようである。人がことばによって他と交わるという言語場の構図は、他ならぬ人間、自らの言語形成のありかたそのものでもある。乳飲み子は他と交わりながら、あるいは母と父と交わりながら、ことばを獲得したのであろう。ことばというものが意味というものに育つありようを体験してきたであらう。〈聞く私〉の周りにはいつも〈話す他者〉があり、〈聞いてくれる他者〉が存在したのである。〈聞く私〉の向こうに〈話す他者〉があり、〈話す私〉の向こうに〈聞く他者〉がある、これはまさに言語形成のありかたそのものであり、対話の根源的なありようであり、そして〈話されたことば〉を学ぶ基本的な図式そのものである。まさしく人間とは人の間に生きる存在の謂である。

こういった意味で、ことばによって人が他と交わるのは、自らを自らとして形成する根源的なありようへの、回帰でもあり、個にあつては絶対に回帰できないという意味において、それは何よりも螺旋的な回帰でもあるだろう。いや、むしろ

ろ〈現在に根源を回帰させる〉⁶⁵⁾といった営みかもしれない。そう言ってよければ、人は今、他者と話しながら、自らの来し方を今へと手繰り寄せる。人は今、ことばを紡ぎながら、自らことばを獲得してきた遥かなる根源を蘇らせる。聞き、話すという今は、まさにそのようにして育ってきた幼き自らが、母語を得てきたありかたへの、断固たる肯定の営みである。

今日、世界は「あからさまに純化された自民族中心主義」⁶⁶⁾に満ちている。そうした中で、ことばを学んだ者でさえ、自らと異なる他者を前に、とすれば「やはりおまえは私と違うのだ」という形で結論づけようとする。そしてその次には絶望や不条理な暴力が待っている。しかしながら、ことばを学ぶという営みの根源的なありようが示すように、何よりもまず世界には自らと異なる他者が存在したのであり、他者が自らと異なることは、結論などではなく、〈始まり〉に他ならない。自らと異なる他者から我々の一人一人がことばを得た。数多く聞こえてきたかもしれぬ言語の中であって、母語とはそのうち記憶に生き残っている特権的な言語のことである。そして聞こえていたそれ以外のあらゆる言語が、実は母語たり得たのである。他者の言語とは、その根源的なありかたからは、常にもう1つの母語たりうる言語に他ならない。他者が自らと異なることは、我々にとって大いなる〈始まり〉である。ことばを学ぶということは、そうした〈始まり〉を絶えず思い起こさせてくれる〈今〉なのであり、そして我々が律しさえすれば、新たなる〈次〉を切り拓きうる〈今〉でもある。

〈話されたことば〉の教育、更に進んで言語の教育は、何よりもことばの中で人が人として生まれ来るありようへの、満腔の肯定に根ざすものでなければならない。〈私が存在しているときには既に、他者が存在したこと〉の圧倒的な肯定から出発する。ことばを学ぶということは、〈隣人を知らねばならない〉というような当為性のみによってではなく、〈自らが在る〉ことの根源的なありように支えられている。こうしたことの中に、〈他者の語ることば〉を学ぶ自然的本質、自ずからそうある本質が存在する。人が人とことばを介して交わるという営みこそが、まさに人が人として生まれ来るありようそのものへの、絶えざる重ね書きなのだと言わねばならない。

65) 西谷修(2002:254)「現在に起源を回帰させること、現在を起源の反復たらしめそのようにして起源との結びつきを回復することが主張される」参照。そこではハイデガーがギリシア語の「デイノン」を「ウンハイムリッヒ」と訳し、そこに「非-故郷的」という意味を際立たせたことをとりあげ、翻訳=解釈をめぐる問題が議論されている。

66) Said(1983:25)参照。

7.5. なぜことばを学ぶのか

なぜことばを学ぶのか？この問いへの発生論的な答え，原理論的な答えは，まさにこうした点に存しよう．ことばを学び，ことばによって他と交わることそのものが，ことばの中に人が人として生まれ来るありようへの圧倒的な肯定，まさに自らがあり，他が存することそのものへの圧倒的な肯定だからである．

これはことばを学ぶ理由ではない．むしろこれこそが，ことばを学ぶ様々な理由の前提となる，まさにそこから〈始まる〉，ことばを学ぶことの揺るがぬ根拠といったものである．

こうした点を見据えるならば，言語教育とは，単に〈道具〉としての〈ことば〉を，あたかも切り売りされる商品を得るごとくに学ぶといったありかたとは，本質的に無縁のものであると言わねばならない．あるいは，はにかみながら，あるいは敵意をむき出しにして，そしてまたあるいは，ことばにならぬことばによっても，自らの意識はどうあれ，語り合う言語場にあつては，人は知と情の全てをかけて語り合う．発話と沈黙の全てをかけて語り合う．ことばを交し合うとは，道具としてのことばをやりとりするというような性質のものではない．ことばを交し合うことによって，ことばを発することによって他者と交わり，人は自らの生まれ来るありようそのものの振動を聞いているのであるから．そして先に見たように，人がエクリチュールを見据えるとき，そうした振動は，〈読む〉こと，〈書く〉ことの中にさえ，聞きうるのである．

先に〈書かれたことば〉に〈人〉はいないと言った．そう，〈読む〉とは，〈人〉の存在しない〈書かれたことば〉に〈人〉を読むことに他ならない．重要なことは，その〈人〉とは他者でありながら，自らでもあるという点なのである．

ことばを学ぶとは，類的な存在としての，自らと他者を同時に見つめなおすという，根源的な営みである．学ぶことによって，そこから出発する〈始まり〉を絶えず確かめうるような営みである．歴史の子たる自らと他を見つめなおす営みである．言語場における今と，今を今たらしめている自らの存在史を確かめることであり，それはまた同時に，未来を可能にする今を築くことでもある．自らの未知に分け入る知を，今ここで得ることによって，他と共にある未来をも切り拓くことでもある．ゆえに，ことばを学ぶとは，独りの個にとって絶対的な自由の領域に属する．言語教育のあり方は，こうした根源的な営みとして捉え返し，位置づけ直すことができないであろうか．言語教育のあらゆるものは，そうした根

源の肯定から出発したいと願うのである.



参考文献

- 姜信沆(1990) “增補改訂版 國語學史”, 서울: 普成文化社
- 고영근(1995) “단어·문장·텍스트”, 서울: 한국문화사
- 고영근 밖예(2002) “문법과 텍스트”, 서울: 서울대학교출판부
- 고영근 외(2001) “한국 텍스트과학의 제과제”, 서울: 역락
- 高永根·成光秀·沈在箕·洪宗善 編(1992) “國語學研究百年史 I”, 서울: 一潮閣
- 金斗鍾(1981) “韓國古印刷技術史”, 서울: 探究堂
- 金敏洙(1977;1986) “周時經 研究 (增補版)”, 서울: 塔出版社
- 김민수 편(1993) “현대의 국어 연구사”, 서울: 서광학술자료사
- 김석득(1983) “우리말 연구사”, 서울: 정음문화사
- 金一根(1986) “增訂 諺簡의 研究”, 서울: 建國大學校出版部
- 노마 히데키[野間秀樹](1996) ‘현대한국어의 대우법 체계’, “말” 제21집, 서울: 연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 노마 히데키[野間秀樹](2002) “한국어 어휘와 문법의 상관구조”, 서울: 태학사
- 노마 히데키[野間秀樹](2006) ‘단어가 문장이 될 때: 언어장 이론 — 형태론에서 통사론으로, 그리고 초형태통사론으로 —’ “*Whither Morphology in the New Millennium?* 21세기 형태론 어디로 가는가” Ko, Young-Kun, et al. (eds.) Seoul: Pagijong Press
- 노마 히데키[野間秀樹]·김진아[金珍娥](2006) ‘NHK(일본방송협회) 텔레비전 교육 방송을 통한 한국어 교육’, “한국어 교육”, 제17권 2호, 서울: 국제한국어교육학회
- 노마 히데키[野間秀樹]·나카지마 히토시[中島仁](2005a) ‘일본의 한국어 교재’, “한국어교육론 1”, 서울: 한국문화사
- 노마 히데키[野間秀樹]·나카지마 히토시[中島仁](2005b) ‘일본의 한국어교육’, “한국어교육론 3”, 서울: 한국문화사
- 朴炳千(1983) “한글 궁체 연구”, 서울: 一志社

本稿をまとめるにあたって, 中澤英彦, 西谷修, 小栗章, 伊藤英人, 月脚達彦, 清水中一といった方々, また大学院生諸氏をはじめ, 多くの方々に貴重な助言を頂戴した. 心より感謝申し上げます.